
Hello, Again

川明俊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hello , Again

【Nコード】

N9481Y

【作者名】

川明俊

【あらすじ】

君にもう一度会えたら、きつと伝えたい。

人生を悲観し、何も見出せない住川俊樹。
彼には忘れられない人がいた。

一人は高校の時に付き合った優しい人。
一人は社会人の時に付き合った明るい人。

優しい人に対し、何もできなかった自分。
明るい人に対し、何もしなかった自分。

10年後の今でも君に言われたあの言葉は忘れられない。

第一話 忘れられない言葉

「トシは誰にでも優しいんだね」

「でもそれじゃあ駄目だよ」

10年後の今でも、あの言葉は忘れられない。

毎日必ず、深い眠りに落ちる前に聞こえてくる。

まるで君は10年後の僕を知っていたかのように言った。

君は、なぜ駄目かは言わなかった。

いや僕がその続きを聞こうとしなかった。

何か心の奥を見透かされたような、そんな言葉だった。

紀子、元気かい。

君の言う通りになったよ。

愛、元気かな。

何もできなくてごめん。

僕は、君にもう一度会いたい。

そしてもう一度伝えたい。

第二話 E I P a s a d o 1

2000年という区切りの年に僕は地元の公立高校へ進学した。高校は小高い丘の上であり、麓には少し大きめの公園がある。

公園内の満開の桜の木にポツポツと雨が当たる音がする。

風が吹くと桜の花びらが舞い上がった。

初日から遅刻しそうな僕は桜には目もくれず、高校を目指し公園内を走り抜けていた。

入学式後、教室へ向かった。

教室は、入学式特有の何とも言えない空気が立ち込めている。

教室を見渡すと小声での会話のやり取りが、あちこちから聞こえてくる。

僕は担任が来るまで自席近くの人とよそよそしい会話をしつつ時間を潰した。

4

「明日以降の予定は次の通りになります」

「では本日は解散です」

担任から説明があり、その日は解散となった。

「じゃあ明日からよろしく」

僕は近くの人にそう言い残し、下駄箱へと向かった。

「ん？」

南門前が異様に騒々しい。上級生が、帰宅する新入生を捕まえ部活動の勧誘をしている。

僕は身長が185センチもあるせいか、目立ってしまい各運動部から次々に勧誘を受けた。

しかし中学時代、1年でテニス部を退部してから運動という運動を

してこなかった。

僕には高校から運動部へ入部するという選択肢はなかった。

僕は勧誘を断り続け、帰宅した。

桜の花も散り始め、木々の緑が映える。

入学式の騒々しさもなくなり、学校はひとまず落ち着きを払っていた。

ある日、他クラスの生徒が僕の教室を入れ替わり覗いていることに気付いた。

はじめは友達にでも会いに来ているのだろうと思っていたが、ほとんどの生徒は僕のほうに視線を向けていた。

高校から友達になった光一が不思議そうな顔をしながら言った。

「トシ、なんかこっち見てる奴多くないか？」

「というよりトシを見に来てる気がするんだけど」

「ああ……たぶん俺だわ。俺双子だから、珍しくて見に来てるんだろ」

周囲の会話が一瞬止まった。

「は？双子ってどういう意味？」

光一が騒ぎだす。

「いや、だから他のクラスに双子の弟がいるってことだって……」

僕はぶっきら棒に言ったが光一も含め周りにいる生徒が騒ぎ出した。

「トシ、双子なのかよ！」

「住川君、双子なの？」

「弟君何組？ちよつと見てくる！」

光一を中心に数名の友達はすぐさま弟を見に行き、戻ってきた。

「トシ、似すぎじゃねーか」

光一が笑いながら大声で話しかけてくる。

そのせいで騒動がクラス中に広がり半分以上の生徒が弟を見に行っ

てしまった。

「一卵性なんだから、そりゃ似てるだろ」

「自己紹介の時にでも双子って言えばよかったのに」

「まあ、そ、そうだな」

双子事件は数日続いたが、直ぐに落ちついた。

小学校、中学校、学習塾と同じ展開に慣れた僕にとってはいつも通りの光景であった。

ある日、弟と一人の友達がバスケット部を見に行くと言いだした。

僕は入部するつもりはなかったが、二人に合わせ見学について行った。

しかし、バスケット部の練習を見学する体育館でまたあの事件が起きた。

そう、双子事件である。

いつも通り適当にあしらいながら僕は見学を続けた。

梅雨は嫌いだ。

一ヶ月でどれだけ降れば気が済むのか聞いてみたい。

雨のせいでバスが通過していく。もう3本目だ。

やっと乗車できたかと思うと、バスの中は湿気臭い上に混雑している。

僕はなぜか3日後には入部届を書かされ、バスケット部に入部していた。

練習は厳しく、ついて行くので精一杯だった。

辞めたいと思いつつも退部届を出す勇気がなく練習に耐えていた。

優柔不断な僕は、流されるままに生きてきた。

姉や弟が学習塾に行くから同じように行った。

学習塾の講師が親と面談し、薦められた進学先に進学した。自分から決めたことは全くと言っていいほどなかった。周りが決めたことだから、その通り行えば文句は言われない。

楽だった。

何かあれば決めた周りのせいに来た。

自分に責任はない。

自己思考は停止していた。

梅雨が終わりに差し掛かる頃、国瀬紀子がマネージャーとして入部してきた。

彼女は小柄で、おっとりしている。

ただ練習が辛かったせいで、僕は彼女の入部時の挨拶は全く覚えていない。

中学時代に運動をしていない僕にとって毎日が地獄であった。

ある日、教室で僕を呼ぶ声がした。

「住川君」

振り返ると紀子がそこに立っていた。

僕は彼女が同じクラスだったことを今初めて知った。

「高校のバスケットボール協会に登録するから、今週中に1500円持ってきてね」

「ああ、わかった」

紀子との初めての会話は、たった一言だった。

梅雨明け、初夏の日差しが肌を突き刺す季節となった。

教室では、期末テストも終わり夏休みの話題で持ちきりだった。

しかし、相変わらず僕は、入部したことを後悔していた。その上、これからは暑さにも耐えなくてはいけないと思うとさらにやる気をなくしていた。

夏休み前、3年生が引退し、2年生を中心とした部活動に切り替わった。

僕はここから夏休み明けまで記憶がなかった。遊びに行くこともなく、練習の辛さ以外、何も思い出せなかった。

夏が終わる頃には元々ある身長や運動神経の良さもあり、試合で使われるようになっていた。

教室では話さないが、部活内で自然と紀子との会話も増えて行った。

いまだに夏の残暑が残っている。

まだ気温も夏に近く、秋の感じは全くといってなかった。

部活の連絡手段として紀子と携帯アドレスを交換してから、僕と紀子は頻繁にメールをしていた。

お互い恋愛感情はなく、仲の良い友達という距離感を保っていた。メールの内容も忘れてしまうような他愛のない内容だった。

気温も下がり始めた頃、練習も終わり帰宅しようとするバスケット部の友達が唐突に言った。

「トシは国瀬のこと好きなの？」

「え？いや、別にただの友達だけだ」

「そうなんだ。国瀬の彼氏と同じクラスなんだけどさ、もうメールするなって伝えてくれって……」「そう」

僕は怒ることもなく、ただ頷いた。

「何もないし、もうメールもしないから心配するなって伝えておい

て」
僕は自転車に跨り、校門へ向かった。

それ以降、僕は紀子との連絡はバスケット部の連絡のみとなり、自然と会話もしなくなった。

恋愛感情はない。バスケット部の友人の顔も立つ。
彼氏も納得してくれたし、誤解を謝ってくれた。

これで問題ないだろう。そう、僕は思っていた。

紀子とのメールや会話がなくなってから2週間近くたった。
家でぼーっとテレビを見ていると、携帯が鳴った。紀子からのメールだった。

メールには「何かあったの?」とだけ書かれていた。
僕は少し考え、「なにもないよ。忙しかっただけ」とだけ返信し、携帯を閉じた。

次の日、一通のメールが届いていた。
「メールも来ないし、会話もないから避けられているかと思ったよ。またメールするね!」
僕は返信せず、携帯を閉じた。

うまく立ち回った”つもり”でいた自分自身がなんだか少し恥ずかしかった。

彼女から頻繁にメールが来るようになった。
他愛のないメールが届く。

授業内容のこと、テストのこと、部活のこと、はまっている歌手のこと。

僕は彼氏のことを考え、長いやり取りすることはなかった。
ただこの頃、僕はすでに彼女惹かれていることに気づいていた。

秋も深まり肌寒くなってきた。日没も早くなり夜が長く感じる。深夜2時、携帯の着信で目が覚める。

「別れた」

紀子からのメールは、その一言だけ書かれていた。

僕は返信できず、数週間が経っていた。

別れたことを喜んでいる自分自身がいるのに、心配する内容のメールなんて送りたくなかった。

だから僕は他愛のないメールには返信するのに、あのメールには返信できず沈黙を続けていた。

紀子のほうは少し落ち込んだ様子はあったものの、周囲には気丈に振舞っていた。

ある時、部活も終わり帰宅しようとして駐輪場に向かうと紀子が話しかけてきた。

「私は大丈夫。私より悩んでどうするのよ」

紀子は笑いながら僕の背中を叩き、去って行った。

僕が悩んでいた理由を紀子は知らない。

ただ純粹に、返信に困っていると勘違いし、僕を心配してくれているのだろう。

もうクリスマスの時期がやってきた。

まだクリスマスまで20日以上あるというのに、街はクリスマスソングで溢れかえっている。

商店もクリスマスフェアと称し、装飾もクリスマス一色だ。

恋人のいない僕にとっては関係のない風物詩だ。

僕は紀子との間に一線を引き、連絡もとらなくなっていた。
この頃、紀子はバスケ部の先輩と付き合い合っていた。

彼氏が先輩だから連絡をとらなかった、というわけではない。
別れてから直ぐ付き合いだしたから、というわけでもない。

これまでの僕と紀子は、素直に自分自身のこと話すことが多かった。

異性の友達との会話やメールとは思えないほど仲がよかった。

何かあれば最初に連絡する人。

そんな義務や義理はないがお互い自然とそうになっていた。

先輩と付き合い合った話を聞いたのは本人からではなかった。

部活前、友達が騒いでいた内容が耳に入ってきただけだった。

友達に話しを振られ、その場は驚いた振りをした。

僕は何かから逃げるようにその場から去っていた。

冬が終わり春が近づいていた。

紀子とのメールは一切なくなった。

少しずつだがお互いメールを送らなくなり、自然とやり取りがなくなった。
教室ではお互い避けているかのように距離をとっていた。

この頃の僕はレギュラーに定着したこともあり、部活に本腰を入れていた。

何か一つのこと打ち込むのは、僕にとって初めての経験で新鮮だった。

紀子のはすっかり気にしなくなっていた。

いやなわてしまった。

第三話 E I Pasado 2

2001年初夏、梅雨も明けた頃、先輩たちが引退する大会はあつけなく負けてしまった。

僕は緊張していたのか、レギュラーで出たにも関わらず、前半でフールが重なり退場となってしまった。

試合終了後、先輩たちの一言と共に次キャプテンの発表があった。僕は試合の責任を感じ、試合終了後からずっと落ち込んでいた。

「次キャプテンは住川」
キャプテンがそう言った。

断ろうとする素振りを見せる僕を遮り、キャプテンは続けた。

「初心者で入部して良く頑張ってくれた。経験者たちをまとめていくのは大変だと思うけど、俺たちの代が話しあって決めた。頼んだぞ」

「最後まで役に立てず、すみませんでした。先輩たちの出場機会を貰ってるのに何もできず……すみませんでした」
僕はひたすら謝っていた。

「住川がいたから勝てた試合もたくさんあった。今日の試合で誰もお前を責める奴なんて、うちの部にはいないよ。それにそれだけ責任感あるなら次キャプテンになっても大丈夫だな」
キャプテンは笑っていた。

僕は気付いたら泣いていた。

その夜、久々に紀子からメールが来た。

「泣きすぎ！これから頑張れよ、キャプテン！！」
気付いたら時間も忘れ、紀子とメールをしていた。

いろいろな話をした。
もちろん話の中に彼氏と一緒に行った場所の話もあった。
でも気にならなかった。僕は純粹に紀子とメールをするのが嬉しかった。

先輩たちの引退を機に、本格的に部は僕たちの代へと受け継がれた。

ただキャプテンになりたての僕にとっては、まず部をまとめることで精一杯だった。

僕は常にストレスを抱えていた。

ある日、部活後に練習方針と内容について部員から文句が出た。

「トシ、実戦練習少なくてね？」

「実戦練習するレベルじゃないだろ」

「いや俺、トシと違って中学からやってるから」

「じゃあその経験者が俺より体力ない理由は？」

「試合に出てたからって調子に乗るなよ！」

「試合に出てたは今関係ないだろ！」

体育館が静まり返る。

「少しは部員の意見取り入れろよ」

「コーチが考えてメニュー組んでるんだ、まず足りない部分を強化するのが先決だろ」

「コーチの言いなりかよ」

「言いなりじゃない、俺もコーチと同じ考えだ」

「それを言いなりって言うんだろ」

言い争いは終わらない。

「わかった、この後コーチに伝えてくる。戻ってくるまで各自シユ

「トレーニングしててくれ」
僕はコーチ室に向かった。

「失礼します」

僕はノックをし、コーチ室に入った。

「どうした？」

「練習メニューのことで相談があります」

僕は先程の内容を伝えた。

コーチは少し考えた後、言った。

「お前は俺と同じ考えなんだろう？なぜ部員をまとめない？まとめるのが役目だろ」

「努力はしました。しかし、もうまとまりません。なので……」
「なんだ？」

「部員に自由にメニューを組ませて下さい。その代わりに俺はその間、一切部に顔は出しません」

コーチはまた少し考えた後、言った。

「お前はどうするんだ？」

「部員が考えなく組んだメニューは出来ません」

「わかった、好きにしろ。あとお前用の別メニューは考えとく明日取りに來い」

「無理言つてすみません」

「早く部員に説明してこい」

「はい、失礼しました」

「集合」

トレーニングを止め、部員たちが集まる。

「明日から次の練習試合まで好きにメニューを組んでいい」
部員たちは声をあげて喜んだ。

「そのかわり明日から俺は部に顔を出さないことになった」

一瞬にして沈黙が生まれた。

「コーチの許可も得ている、じゃあ今日は解散」
部員たちは呆然と立ち尽くしていた。

おそらくこんなことになるとは思っていなかったのだろう。

僕は無言で体育館をあとにした。

次の日の昼休み、僕はコーチ室へ向かった。

コーチからメニユーが書いてある用紙を渡された。

「体力系メニユーは書いてある通りにやっておけ。あと俺の卒業した大学の監督に練習を見学させて貰えるよう頼んでおいた。監督のことだ練習にも参加させてくれるだろう、いい経験になるからやっこい」

「迷惑掛けてすみません」

「練習試合の前日に集合時間は連絡するから試合には来い」

「はい」

「じゃあ俺は忙しいんだ、さっさといけ」

放課後、僕は部室に向かわず、コーチに紹介された大学へ向かった。

大学は高校の最寄の駅から電車で3つ目のところにある。

大学の体育館へ向かい、監督とチームキャプテンに挨拶をした。

「部員と喧嘩して逃げてきたキャプテンってのは君か」

監督は笑いながら言った。チームキャプテンも笑っている。

「練習は週に5日、今の時期の練習は君にも出来るだろう。部員には説明してあるから参加していくといい」

チームキャプテンは言った。

大学での練習は、基礎的な練習が多かった。

ただ高校の練習とは明らかに違っていた。

部員全員が意識をもって練習に取り組んでいた。少しでも疑問がでると練習を止め、各々確認している。

一つ一つの練習の目的、チームの強み、弱みを全員が理解していた。練習が終わり、僕は監督と部員たちに挨拶をして帰宅した。

僕が高校の練習に顔を出さず、二週間が過ぎた。

夜、風呂からあがると後輩からメールが入った。

「トシさん、練習になってません。半分遊びのようになっていますが、俺は遊ぶために部活にきてる訳じゃありません。戻ってきて下さい」メールだけじゃなく着信が何件も入っていた。

紀子からもメールが来ていた。

「コーチからは心配すると言われてますが、何をしているかわからず心配です。今は実戦練習ばかりしているせいで、怪我をする人が日々増えている状況です。コーチの練習メニューに戻そうと言っている部員も出てきており、日々、部員同士喧嘩ばかりしています。少しで構わないので連絡と簡単な指示をもらえると助かります」

僕は何もせず、携帯を閉じた。

練習試合前日、大学での最後の練習を終え、監督に挨拶をしに行った。

「お世話になりました、それと……ご迷惑お掛けしました」

「うちの練習に参加して何か得られたかい？」

「練習への意識の違いと部員同士の意思疎通の大切さがわかりました。全員、チームのために練習をしている感じを受けました」

監督は何も言わず頷いた。

「練習方針、練習内容は大切なことです。でもそれ以前にとっても大切なものがあります、それを意識せずに練習方法を変えたところでは誰も上手くなりません」

監督は続ける。

「まず君はキャプテンという責任を放り出したことを部員に謝りなさい。そして君が3週間で得た経験を部員たちに分け与えて下さい」監督は笑った。

「はい、有難うございました」

僕は深々とお辞儀をし、体育館を後にした。

練習試合当日、前日にコーチから連絡をもらった時間にコーチ室へ向かった。

「今日、お前は出さない予定だ」

「はい」

「大学の練習はどうだった？」

「いい練習でした、そしてすごくいいチームでした」

「そうか」

「じゃそろそろ相手校に挨拶しに行くぞ」

コーチ室を出て、体育館に向かう。3週間振りだ。体育館に入ると驚くように部員たちが一斉に僕を見た。コーチに共に相手チームへ挨拶をし、自陣ベンチへと向かう。

「スタメンは誰だ？決まってるんだろ？」

部員たちはコーチの言ったことが理解できず驚いている。

「今日に向けて練習を組んだんだろ？決まってないのか？」誰も返事をしない。

相手校はもうコートに出てきている。

「すぐに決めろ！」

コーチが一喝をすると、2年があわててジャンケンをし出した。

「何をやってるんだ……」

コーチはボソツと言った。

僕は一言も話さず、試合を観戦していた。

コーチは指示はあまりせず、タイムアウトのタイミングも2年の部員に任せていた。

前半から20点差をつけられ試合になつていなかった。

後半に入っても点差が広がるだけだった。

後半も残り半分となったところで後輩がコーチに言った。

「コーチ、トシさんが必要です。メンバーチェンジの指示お願いします」

「今日、こいつは出さん」

「でも今のままじゃ試合になりません」

次々と1年部員がコーチに頭を下げる。

2年部員、特に練習指示をしていた数人たちはバツが悪そうにしていた。

「だそうだが、どうするかはお前が決める」

コーチが僕に言った。

「今日は出ません、出る資格はありません」

「1年、お前たちの中から5人選べ。ジャンケンじゃなく自分たちで選べ」

落ち込む1年に僕は言った。

「もう決まっています」

後から聞いたが、1年同士の練習試合もあると思い、すでに自分たちで事前に決めていたそうだった。

2年と1年をメンバーチェンジしても試合の流れは変わらなかった。

ただ点差が開くことはなく、残り10分だけを見ると引き分けであった。

練習試合が終わり、相手校が帰ると体育館でミーティングが始まった。

(続く 2011/12/7記)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481y/>

Hello, Again

2011年12月7日00時57分発行